

碧い羽

喜界町立喜界中学校 二年 濱川 双葉

これは今から二十年前の小学生の頃の僕の不思議でゆかいな思い出の話。

僕の実家は田舎の中でも田舎の小さい町で、一步外に出れば大きな森が広がっていていつも学校が終わった後は友達とその森で遊んでいた。

青空にセミの声が鳴り響くような夏の日、僕は一人でその森に向かった。中に入ると小さな川があり僕はいつも一人の時はここに来ているのだが今日は先客がいるようでここらでは見ない顔だった。

「君は誰。」

「僕？僕はルリ。君の名前は？」

「碧皇。よろしく。」

「よろしく、碧皇はこの辺に住んでるの。」

「ああ、そうだけどルリは。」

「遠い所から来たんだ。遠い、遠い、ところから、夏休みだからね。」

ルリは少し切ない笑みを浮かべた。

「そっか、じゃあ夏休みの間はずっとここにいるの。」

「そうだね。」

「もしルリが良かったら明日も一緒に遊ばない。友達がみんな旅行に行つてて、暇なんだ」

「いいの。ありがとう。」

「じゃあ、明日もこの場所で。」

それから僕とルリの夏休みが始まった。

「ルリ、早いね。今日はシャボン玉を持ってきたんだ。」
そう言つて僕とルリはシャボン玉を天に向かって送つた。シャボン玉を見ているルリの眼がガラスのようにキラキラと光っていて、風や水の音がいつもより耳に響き、彼の眼に引き込まれそうになる。首をおもいっきり張り正気に戻る。

いつも見ている景色が、ルリといると全く知らない世界にきたようだ。

「碧。碧。大丈夫？」

「ん。ああごめん。大丈夫。」

「本当に。体調悪かったら今日はもう帰つてもー。」

「そうだな、じゃあ僕ん家の裏庭で遊ぶのはどうかな。家はクーラーもついてて涼しいし少し休んでから夏野菜を食べない。」

「碧が良いなら行こうかな。もうすぐお昼だしね。」

しまった、ルリを心配させてしまった。急に家にさそうなんて、男とはいえ、気味悪がられていないだろうか。

なんて考えていると、すぐに僕の家についた。

「ばあちゃんただいま。」

「お帰り碧くん。お友達かい。」

いつも通りの優しい声、僕はばあちゃんが大好きだ。

「そうだよ。ルリっていうんだ。」

「おじゃまします。」

「ルリくんいらっしやい。ゆっくりして行ってね。あと、

そうめんは好きかい。」

「はい。」

「はいよ、じゃあ出来たら部屋に持っていくね。」

「ありがとうございます。」

ばあちゃんはこのと笑い、台所に戻った。

「部屋にいかがか、ルリ。」

「うん。」

「碧のおばあさん優しい人だね。」

「うん、いつも本当に優しいんだ。」

僕の部屋につき、くつろいでいると、ばあちゃんがそうめんを持ってくる。

「ゆっくりして行ってね。それと、ばあちゃん、買い物に行ってくるからお留守番よろしくね。」

「分かったあ。よし、じゃあ食べようか。」

「うん、いただきます。」

「これ、すごく美味しいよ。トマトも入ってるし。」

「そうでしょ、このトマト裏庭で育ててるんだよ。」

「ああ、さつきいつていたやつか。いいなあ。ねえ、あとで見せてよ。」

「もちろん。トマトだけじゃないよ。ナスもキュウリもスイカもあるよ。そうだ。明日はスイカ割りしない。」

「それいいね、絶対楽しいよ。」

「でしょ。早速採りに行こう。」

庭に出ると畑が広がっている。僕にとってはいつもの光景だが、ルリは珍しいのか、また眼をガラスのように輝かせる。

「すごいね碧。僕こんなの初めて見たよ。これはトウモロコシだよ。僕が知ってるものと比べ物にならない位大きいよ。」

よほど珍しいのだろう。ルリは興奮気味に色々な野菜を見ている。僕はそんなルリを横目に一番大きいスイカを採る。

「よし、明日はこれを一緒に食べよう、ルリ。」

「うん、楽しみにしてる。じゃあ、明日もいつもの場所。」

と、言いルリは帰った。

その日の夜、母さんと父さんが来た。

「突然だけど、貴方も私たちと一緒に、東京に行くから、来週までに荷物をまとめておいて。」

「なんで急に、そんなことー。」

「ごめんね、仕事だから許してちょうだい。」

明日、ルリに何て言えば、そんなこと考えてるとすぐに朝がきた。スイカを持って、今日もいつもの場所へ。

「ルリ、今日もはやいね。」

「碧、おはよう。何だか元気がないね。」

「そんな事ないよ。早くスイカ食べよう。」

それから毎日ルリと二人で遊んでいるが、僕はまだ引っこすことを伝えることができないまま、とうとう明日が引っこしの日だ。

今日こそは伝えよう。

「碧、おはよう。」

「：おはよう、ねえルリ、僕。」

「どうしたの。」

「：引っこすことになった。」

「そっか。もうすぐ夏休みも終わるしね。」

「ありがとう。」

「絶対また会おう。」

「ずっと待ってるね。この場所で。」

これが僕の特別な思い出。成人したので、祖父母に顔を見せるついでにルリとの思い出の場所に行ったんだ。どうせ誰もいないと思っていたが一人、いや一羽、先客がいた。

「お前も誰か待っているのか。」

と言い、鳥を見る。よく見ると、ルリの目に似た羽の色をしている。

「もしかして、ルリか。ルリなのか。」

「ピールリ、ピールリー」

「そうか、本当に待っていてくれたんだな。」

「ありがとう。」

「こちらこそありがとう。」

と言うようにルリは天へ飛んで行った。

ルリがいなくなった後も、ここに来れば会えるような気がする。

だから今日も碧い羽をもつていつもの場所に行く。